常葉大学健康プロデュース学部雑誌
第12巻第1号，2018年2月，129－135頁

研究ノート

循環成長型アートプログラムの方法と実践　Ⅲ

村　上　　誠

こども健康学科

Methods and Practice of Circulating and Growing Art Programs　3

Makoto MURAKAMI

要　旨

乳幼児のアートの活動を「循環し成長する」身体性に注目し、作品という一点に留め置かれないアートの活動を『循環成長型アートプログラム』として実践した報告の3回目。本稿では、「絵本から始まる」をテーマにしたプロジェクト型保育、その1年間の活動を報告する。絵本を見る・読むから始まった活動は、絵本をつくることから絵巻物の制作につながり、さらに保育室の中に図書館をつくりあげ、最終的にそれらの活動の記録を大きな絵本にして、保護者の前で発表することにまで至った。

キーワード：循環成長、アートプログラム、プロジェクト型保育、アート教育

Abstract

This is the third report of art activity practice that we do not retain one point of a work as “Cyclical Growth type of Art Program” by focusing on embodiment, “circulating and growing” for infant art activities. This article reports Project Type of Childcare with the theme of “Starting from a Picture Book” and the activities during one year. The activities started with looking at and reading a picture book led to create a picture book and a picture scroll, and further established a library in the childcare room, and finally reached to have a presentation in front of their parents by creating a big picture book on the records of those activities.

Keywords : Cyclical growth, art program, project type of childcare, art education

はじめに

前稿[1]では、『循環成長型アートプログラム』の現時点でのイメージを明確にした。子ども、中でも乳幼児のアートの活動は、考えることからつくることへ進展、さらにつくったもので遊ぶことによって、彼らの創造物は壊れ、やがて消えていく。しかし、壊れたものや消えたものは、完全になくなってしまうのではなく、時を超えてまた再生されることを、保育現場での実践を通して明らかにした。子どもの活動は、単純な循環のくり返しではなく、循環しながら成長していく。つまり「再生する」エネルギーが、子どもの成長を促すことになり、再生の度に生じる少しの差異こそが、新しい展開のための大きな要因となると考えられるのである。

本稿で述べる実践例は、前回報告した「プロジェクト型保育」をもう一度丁寧に試みたものである。前回の実践では、当初からプロジェクト型保育を意図したのではなく、1年間の活動の中で、結果としてそのようになってしまったからである。

また、プロジェクト型と言われる保育形態に関しては、レッジョ・エミリアの幼児教育が我が国に紹介されて以降、この方式が大きく注目されることとなったが、この方法論は日本の多くの幼稚園・保育所で100年近く前から実践されてきたのであるから、その事実を踏まえ、特段にこの方式を注視するのではなく、これまで多くの保育現場で実践されてきたものとして、この方式に寄り添ってみたいと思った。

乳幼児のアートの活動を「生きる営み」として捉えるなら、活動の全体がプロジェクト型であることは不自然ではない。発達年齢に従って教科教育に特化していく小学校以降における教育と保育・幼児教育はその根本において、子どもへの関わり方の主眼が異なるのである。また、活動の流れを「作品」という一点に留め置くのは無理がある。乳幼児は大きな成長段階にあり、「作品」という捉え方そのものが、全方向的に展開していく彼らの成長には適していないことを、私たちははっきりと認識しておく必要がある。

1．プロジェクトの始まり

前稿同様に、本稿の実践も島田市の民間保育園Ｙでのものである。筆者がこの園に関わって3年目になる。初年度は職員研修の講師として、2年目は園のアート活動の援助＋活動の企画・実践者として関わった。今回は、1年間を通して関わるのは前回と同じであるが、関わり方は大きく異なる。毎日の子どもたちの生活に深く関わるのは担任の保育者であり、その保育者が援助・指導の中心である。外部の人間である筆者は、子どもたちにとっては外から来た「お客」にすぎない。お客は、いつもそこに居るのではなく、時々、あるいは時を定めて現れる「異人（マレビト）」[2]である。つまり筆者は、1年の前半は保育者の援助者として主に保育内容の企画に加わり、後半になって少し複雑な活動に入る時点で、実際に保育室に現れるのである。

2016年の3月下旬、Ｙ保育園の各クラス担任が決まった時点で、年長クラスの担任、副担任、主任と筆者が年度開始前のミーティングをもち、4月からの活動の大枠を決めた。まず、筆者の立場を確認し、新年度が始まって子どもたちと保育者との生活が軌道に乗ったところで、年長クラス担任と副担任が年間を通して取り組めるようなプロジェクトのイメージを探る。そしてそのイメージが少し具体的になった時点で、その後の展開を模索していくということになった。

園全体が本格的に動き始め、子どもたちが落ち着いた5月の下旬に最初の打ち合わせをもった。そこで保育者から提案されたのが「絵本」。年長組になったこともあり、子どもたちがとても興味を持っていること、また保育者自身も絵本に興味があり、絵本を通して子どもたちが様々なもの・ことに関心と視野をひろげていくような生活と成長を見つめ・応援したいということだった。その話し合いでは、これからクラス内で積極的に絵本を読み、絵本を通した遊びを意識的に進める。さらに、絵本を受け入れるだけの受動的な動きだけでなく、能動的に絵本と関わる方策もこれから考えていくということになった。

絵本に親しむ活動は、新年度が始まると同時にスタートし、たくさんの絵本を保育の中で読み、ほとんどの子どもたちが園にある絵本を家に持ち帰って、家庭でも読み聞かせ（読み語り）がされた。希望する保護者が保育園で子どもといっしょに過ごす"保育参加"では、保護者が積極的に絵本の読み聞かせを行った。自分が子どもの頃に読んだ絵本を読むお母さんもいた。送迎時の保護者との会話の中でも、絵本のことがよく話題になり、子どもたちの絵本への興味が家庭に浸透していく様子がうかがえた。また、子どもたちが普段の遊びの中で、小さな絵本をつくっていることがあり、それを最初の実践として取り上げることにした。与えられる（受動的な）絵本から、絵本を（能動的に）つくるのである。子どもたちはすでに、描くことは充分に体験していたため、それ以外の方法を試みることにした。その手法としてコラージュを選んだ。

2．実践①　コラージュ

絵本が子どもたちの保育園での生活に根づいた秋に、コラージュを実践した。園の子どもたちはコラージュの体験がなかったこともあり、遊びとして新鮮ではないか

[1] 拙稿「循環成長型アートプログラムの方法と実践 Ⅱ」常葉大学健康プロデュース学部雑誌第11巻第1号、2017年
[2] 折口信夫（国文学・民俗学）の定義による。

と判断した。切って貼るという単純な遊びであるが、あらかじめ自分なりのイメージを思い浮かべることができると、より楽しむことができる。しかし、初めての体験であるから、そこまでは求めず、選ぶ・切る・貼るという作業そのものを楽しむことを、第一の目標とした。

“コラージュを体験する”

日時：2016 年 10 月 27 日

男児 9 名　女児 8 名

時間的な流れは、以下のようである。

	■素材 ・チラシ、パンフレット類、子ども向けの雑誌など ■道具 ・画用紙（四つ切）はさみ、のり、蜜蝋クレヨン
10：00	■導入 ・子どもたちの前で、チラシから写真を一枚切って、貼る動作を見せる程度にして、細かな指示はしない。 ・素材（チラシなど）は、2 つのテーブルの上に、子どもたちが見やすいように置く。
10：10	■制作 ・何を選び、どのように切るか、貼るか、クレヨンを使うかなど、できるだけ自由に活動する。 ・さらに続けたい子には、八つ切り画用紙を提供する。 ・今回は、切る・貼るという単純な遊びに留める。
11：00	・でき上がった段階で保育者は、コラージュしたものに意味や物語を聞き取り、邪魔にならない程度に画面に鉛筆で書き込む。 ・翌日、壁に全員のコラージュを掲示する。

どの子も初めての体験ということで、選ぶ・切る・貼る、のすべてに興味を示し、1 時間の活動を予定していたが、実際には 2 時間も続いた。ほとんどの子がすぐに始めたが、どうしていいのかわからず活動に入るのに少し時間がかかった男児が一人いた。しかし、始まるやいなや、すぐにその世界に入り込んだ。もう一人、いつも周囲を気にして充分な表現ができないでいた女児は、この日は何のためらいもなくチラシを切って、どんどん貼っていった。

保育者の反省として、①チラシの種類と量の判断に迷った。②のりを塗りすぎる子がいる。③どの子も、それぞれのイメージで制作したため、同じものがない。④当初、1 時間くらいを予定していたが、全員 2 時間かかり、昼食後に続けて作業した子もいた。⑤自分で絵本のようなものをつくる子もいた。

3．実践②　コラージュでつくる絵本

実践①のコラージュの体験をベースに、イメージのつながりを具体的に表現する絵本の制作にチャレンジした。

“コラージュでつくる絵本”

日時：2016 年 12 月 2 日

男児 9 名　女児 8 名

時間的な流れは、以下のようである。

	■素材 ・前回と同じようなチラシ、パンフレットなど。 ・子ども向け教材のパンフレットやカタログを加えた。 ※素材の種類と量は詳細まで検討する。 ■道具・教材 ・はさみ、のり、蜜蝋クレヨン ・用紙（厚手の四つ切画用紙を、縦半分と横半分に切ったもの） ・ホッチキス（雑誌留めの方法で使用する）
10：00	■導入 ・単純に一画面に貼ることから一歩進めるために、イメージのつながりを促すような言葉がけを試みる。この時、画用紙の縦と横のパターンを見せ、絵本のようになることを示す。
10：10	■実践 ・自由に制作できるようにする。 ・途中、蜜蝋クレヨンでの描画、文字の書き足しも促す。 ・できれば表紙まで制作する。
12：00	■できあがった絵本 翌日、お互いに読み合う、小さな子を招いて「読み聞かせ」の会を開くことも可能。

素材として、子ども向けの教材や文具のカタログなどを追加した。2 度目のコラージュということで、簡単な言葉がけだけでスタートした。画用紙の組み合わせ方も、すぐに理解できた。前回のコラージュ体験が楽しいものだったため、今度はどのようにすればよりおもしろくなるのかを各自で考えたようだ。そのことは、集中して取り組む姿と活動時間の持続からうかがうことができた。またできあがった絵本は、すべてイメージのつながりがあり、個々の物語となっていた。

1 日の活動で終了した子が 8 名、翌日まで続いた子が 6 名、翌々日までが 3 名だった。一人の男児が、最初のうち何をやっていいのか迷い、ひたすらチラシをはさみで切り、その後、切ったチラシを画用紙に貼ったり剥がしたりした。最終的にはハンバーガーショップのチラシを全面に貼り、表紙に大きくMと書いた。

出来上がった子たちは、さらに大きさの異なる絵本もつくった。その中で、不思議なものがあった。子どもの手のひらにのるほどの紙の塊があって、ゴミかと思って拾い上げると、なんと、丸められた紙（屑）の中に小さなプラスティックの台があって、そこに高さ 2㎝弱の絵本がのっていた。プラスティックの台はハンドソープの留め具で、それはちょうど絵本をのせることができるサイズだったのだ。コラージュではなかったが、絵本とそれを置くための台、さらにそれらがそこに有るための環境までもがつくられたのである。あたかもゴミの中で偶然見つけた絵本、のように。

4．実践③　巻物絵本をつくる

実践②までは、2 人の担任保育士が実践し、実践③から筆者が加わった。我が国の絵本の歴史をたどってみて、平安時代の絵巻物に行きあたった。絵巻物は、物語としての時間の流れに、イメージとしての描画の展開が加わったもので、これは子どもにはわかりやすいかもしれない、子どもたちといっしょに本物を鑑賞したいと思った。しかし、本物の鑑賞は地方都市では現実的ではない。そこで、子どもでもわかる絵巻物‥、日本のアニメーションの原型とも言われる『鳥獣戯画』しかないと思い、レプリカ全 4 巻のうちから、猿や兎が登場する第 3 巻を探し出し、それを子どもたちと見ることを活動の導入とした。

1）“絵巻物をつくる”

日時：2016 年 12 月 20 日
男児 9 名　女児 8 名
時間的な流れは、以下のようである。

10：00	■素材 ・障子紙 ・子どもは絵を描き、巻物にするのはスタッフ ■道具・教材 ・蜜蝋クレヨン、絵の具 ■導入 ・筆者が初めて子どもたちの前に現れ、絵巻物を出して、ひろげてみる。それを鑑賞した後、絵巻物をつくる作業に入る。
10：15	■実践 ・横長の障子紙に、クレヨンで描く。長い紙であることから、子どもたちのイメージも、長いことを意識したものになるはずである。 ・蜜蝋クレヨンは和紙でも滑りが良いので描きやすい。
12：00	・次に絵の具で彩色する。 ・できたものは新聞紙の上で乾かす。

筆者が初めて子どもたちの前に現れる。時々園に訪れていたため、まったくの初対面ではない。

子どもたちへの語りかけとして、①子どもたちのつくった絵本を見せてもらったが、大変すばらしかった。②ぶどう組（年長クラス）になってずいぶん絵本のことに詳しいと聞いた。でも、昔の絵本のことは知らないだろう？と、少し挑発的な対話を進めた。そして、『鳥獣戯画』のレプリカを箱から出し、長いから机をつなげてくれるように、子どもたちに頼んだ。そして、鑑賞会が始まった。

その中で話題になったことは、①自分のつくった絵本はページを追って見ていくが、絵巻物はずっとつながっているから、全部を見ることができる。②絵巻物は黒だけで描かれているから、色がついていた方がいい。③布（台紙となる）が使ってあるし、紐（結び用）もついている、などの意見も出た。

昔の絵巻物は一人でつくったのではなく、絵を描く人と、布や紐を使って巻物にする人は別の人で、さらに、大切なものだから特別な箱をつくる人もいたことを話してみた。そのような会話の後、長い和紙にクレヨンで絵を描き、絵の具で彩色した。それができあがった時点で、筆者が子どもたちの絵を預かり、冬休み明けに、巻物のようにして持ってくることを約束した。そして、これを入れる箱は自分たちでできるだろうということになり、大切な絵巻物をしまう箱を、冬休みが過ぎてから自分たちでつくることになった。

2）巻物を入れる“箱”をつくる

2017 年 1 月 12 日
男児 8 名、女児 8 名（欠席児は翌日に制作）
時間的な流れは、以下のようである。

	■素材 ・少し大きめの空き箱多数 ・布切れ、毛糸、紙の切れ端 ・細長く裁断した英字新聞（箱の中の詰め物として） ■道具・教材 ・はさみ、のり、蜜蝋クレヨン、絵の具
10：00	■導入 ・完成した自分の巻物が、ちょうど収まるくらいの空き箱を探すことから始まる。 ・箱の大きさ、素材の選択と扱い方など、すべて子どもたちの判断に任せる。
11：15	・完成したものを、机の上に並べてみる。 ・交換して見せ合う。

空き箱は子どもたちがじっくり選べるくらいの数を用意した。その中から選び、自分の絵巻物をしまうための箱をつくった。素材はほとんどが廃材。包装紙を貼る子、毛糸を並べて装飾、布を裁断して包む、など。完成した後、みんなで見せ合おうとしたが、“宝箱”だから、他の人には見せないという子もいた。

5．実践④　図書館に行こう

日程の都合で、実践③の 2）と前後してしまったが、図書館訪問を試みた。

絵本がたくさんあるところはどこかと問いかけ、本屋さん、保育園の図書コーナー…、もっといっぱいあるところは、図書館。それならそこに行ってみよう、ということになった。もちろん、図書館訪問はあらかじめ計画していたこと。市立図書館は園から徒歩 20 分ほどのところにあり、何人かの子どもたちはすでに家族で行っているようだった。

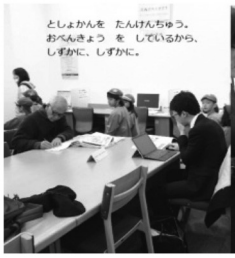
担任は事前に図書館を訪問して、5 歳児が 17 名訪問すること、図書館の役割や機能を 5 歳児でもわかるように説明してほしいこと、また、絵本の部屋での「読み聞かせ」をしてほしいこと、を伝えていた。これは園を外の環境につなげていくための大切な活動であり、図書館からすれば、図書館を認知してもらうための重要な仕事でもある。特に、小さな子はこういったところに一人で行くことはできない。保護者と共に訪れるのであるから、幼い子どもの訪問はその家庭を丸ごと巻き込むことにもなるのである。この図書館にとっては、幼児が団体で来ることは初めての体験となった。

1）“図書館探検”

日時：2016 年 12 月 28 日

男子 9 名　女子 8 名

時間的な流れは、以下のようである。

9：30	■出発 ・途中で出会う、人、物、事の一つ一つが豊かな体験となるように、付き添う保育者は気を配る。 ・会話、歌、動き、そういったものにも丁寧に寄り添う。
10：00	■図書館に到着 ・3 階のフロア―全体が子ども用の空間、その中に「絵本の部屋」があり、そこに集まって、図書館員から話を聴く。 ・次に館内を巡る。子ども用図書から、大人用の図書まで見て、点字絵本を体験、そして貸し出しカウンターの仕事、学習室を巡る。
11：00 11：45	 ■絵本の部屋で、図書館員の絵本の読み聞かせを体験する（3 冊）。その後、自由に子ども用図書を見学。 ■図書館のスタッフにお礼を伝えて帰途につく。

図書館での体験は子どもたちにも、私たち大人にとっても新鮮な驚きに満ちていた。まず図書館側の対応は、初めての幼児の団体ということで、何をどこまで説明すればいいのか、苦慮されたようだ。また一般の来館者も多数いる中で、子どもたちをどのような道順で導いていけばいいのかも悩まれたようだ。結果としては、子どもたちは図書館の雰囲気、特に大人のいる場では静かに振舞うことができたし、出入り口や貸し出しのシステムは、とても新鮮だったようだ。特に、本を消毒する機械と点字図書は強く印象に残った。

園にもどって、昼食の後、図書館のことを語りあった。そして保育室にあった紙に、それぞれ印象に残っていたことを絵や文字で描いていった。手が届かないような大きな本棚、本を消毒する機械、点字の本、勉強する人、

↑　子どもたちが書いた図書館についての情報の一部

コンピューターなどが次々に描かれた。そして、帰りのあいさつの中での図書館スタッフの言葉、「来年も、ぜひ来てね」が話題になった。「来年は、ぼくたちは小学校に行くから、ぶどう組でそろって行くことはできない」「来年のぶどう組さんが行けばいいね。だったら、地図を書いて残していこう」となった。

2)“図書館までの地図を描こう”

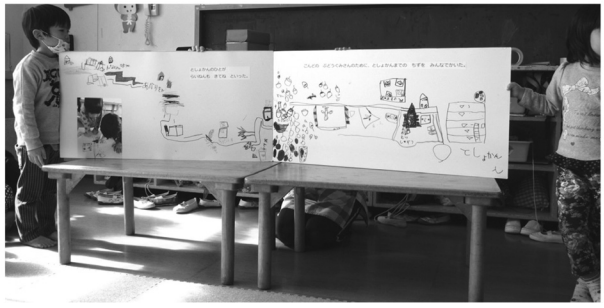
年が明けた2017年1月6日、大きな紙2枚に17人が分かれて、図書館までの地図を描いた。8人がスタートから、9人が終点の図書館から。子どもたちは意見交換をしながら、全体のバランスを考えて描いていった。「○○ちゃんの家」「水が流れていて、木の実が落ちていた」「あの家の前のコンクリートにビー玉が埋めてあった」「うんうん、キラキラしてた」。確かに、その日は晴天で、水も木々も、そして通りがかった家の駐車場に埋め込まれたビー玉も輝いていた。

↑　子どもたちが描いた地図

6．実践⑤　図書館をつくる・大型絵本をつくる

2017年1月28日が保護者を招く作品展が予定されていた。この年から、これまでの作品展とはちがった「子どもたちといっしょにあそぶ会」とでも呼べるようなものとなり、年長クラスは、これまでの活動をひとまとめにして保護者に見ていただきながら、さらに保護者と園児がいっしょになって遊べるような会場づくりをした。まず会場の全体を図書館に見立て、そこにこれまでにつくったコラージュの絵本と巻物を並べた。来場者である保護者や小さな子どもたちは、そこで自由に展示された絵本や絵巻物を見ることができた。

また、これまでの活動の記録を大きな絵本にした。まず、コラージュを体験している様子を写真で構成し、絵巻物との出会いや制作風景も写真で構成してダンボール板に貼った。次に、図書館に向かっていく道すがらと図書館内での様子も写真で構成し、子どもたちの描いた図書館の記録（メモや描画）は、そのまま大きな画面に貼り合わせた。最後に、次の年長組のために描いた図書館までの地図を貼って、大きな絵本は完成した。それを「子どもたちといっしょにあそぶ会」の当日、図書館に集まった保護者の前で、子どもたち全員で読みあげた。



↑　大きな絵本を読む（リハーサルの様子）

7．問題点と今後の展開

この実践から問題が2つ明らかとなったため、現時点での考察を述べておく。

1）なぜ、絵画ではなくコラージュなのか？

絵本をつくるのなら絵を描けばよいとも考えられるが、敢えてコラージュという手法を採用した。なぜなら、絵画は子どもの表現活動として原初のエネルギーに満ちたものであり、人間の芸術の発生と重なる重要な活動である。しかしそれは、描画能力においては人間の芸術の発生初期のことであって、幼児期に達した子どもたちは、すでに発生初期の段階とは言えない。また、芸術教育として洗練されてきたかのように見える「子どもの絵」は、100年余の歴史を経ることで、かえって様々な付帯的要素が手垢のように付いてきてしまった。このことに関しては、いずれ稿を改めて論じたい。

ともあれ、5歳児ともなるとすでに発生初期という段階ではなく、そのような子どもがいつまでも「絵画・造形」という領域だけにとどまっているはずがない。ちょうど現代社会における美術が、絵画・彫刻・デザインといった領域分けが無効になってしまったのと同じように、子どもたちもまた、様々な文化的様相、様々な文化的媒体に取り巻かれているのである。コラージュは、他からの引用の組み合わせであり、見ようによっては真に創造的な行為ではないと考えられるかもしれない。しかし創造性をオリジナリティーとの関りで考えるなら、そういった神話[3]にいつまでもこだわることは、すでに現在的ではないように思える。子どもにだけ美術のオリジナリティーを望むことには無理がある、そのことがコラージュという技法を選んだ一番の理由である。実際、子どもたちは切って貼るだけで表現できないところには、絵や文字を描き込んでいった。表現のための技術は、5歳ともなれば、自分自身で考え選択することができるのである。

2）おとなの援助は、どこまで必要なのか？

今回の実践では、プロジェクト型とは言うものの、すべてが子どもたちの発想で進んだわけではない。1年間

[3] 山田将治『日本文化の模倣と創造』角川学芸出版、2002年

のおおよその流れはおとなの考えたように進み、できあがった「図書館」も、そこに保護者を巻き込むことも、概ね想定通りのことだった。

筆者が絵巻物を持って登場する実践では、何度も「これはやり過ぎではないか？」と自問した。この遊びを構想し始めた時も、『鳥獣戯画』のレプリカをインターネットで探していた時も、そして実際に子どもたちの前に巻物を広げた時も、そう感じた。しかし、食い入るように巻物を見る子どもたちの表情、楽しそうに自分の絵巻物を描く彼らを見ていて、そのような疑問は少しずつ薄らいでいった。

絵巻物の箱をつくることを、遠回しに子どもたちに提案した時、「なあ〜んだ、おじさん、そんなこと、ぼくだって考えたよ。でも、おじさんも知っていたならもっと早く教えてくれてもよかったのに。それに、箱だってこんなに持っているじゃん。」と、彼らが口にしたわけではないが、子どもたちの表情からそのようなことが読み取れ、安堵した。5歳児にもなると、自分のできることとできないことは、だいたいわかってくる。できないことや扱えないものは、おとなに協力してもらえばいい、とも思っている。そのためにおとなの私は、ここにいるのである。これは教える・教えられるという一方向的なものではなく、子どもたちの興味・関心の力によって、おとながこっそり抽斗にしまってあったものが、子どもたちに引き出されてしまう、ということなのかもしれない。

次の展開では、そのような子どもたちとの積極的な関りを視野に入れた方策を模索してみたい。そのためには、今ある抽斗だけではとても足らない。さらに研鑽を積まなければならない。

最後に、このような実践をいっしょに試みてくださった、Y保育園の園長先生をはじめとするすべての職員の皆さま、特に年長ぶどう組の担任である千佳先生と菜摘先生には、心より感謝申し上げます。

（2017.9.11 受稿，2017.10.4 受理）